

一次産業から始まるTNFD

みなさんはTNFDという言葉聞いたことはあるでしょうか。TNFDとはTaskforce on Nature-related Financial Disclosuresの頭文字をとったもので、企業が「自然資本（生物多様性・森林・水など）」に関するリスクと機会を開示するための国際的な枠組みです。いまや世界の投資家等が注目するテーマとなっており、将来的な開示義務化も視野に入ってきたことから、企業の対応は急務となりつつあります。

しかし実は、自然資本と最も密接に向き合ってきたのは、農業・林業・漁業といった一次産業の担い手です。彼らは日々自然と向き合い、変化を受け止めながら生産活動を行ってきました。その意味で、一次産業はTNFDの議論の中心に立つ存在と言えます。

私自身、多くの企業のTNFD開示支援に携わる中で、一次産業が抱える固有の難しさを何度も伺ってきました。例えば、農業では、土壌の健全性や水の持続性、微生物の働き、気候変動の影響をどう測るのか。林業では、木材生産だけでなく、水源涵養^{かんよう}や生物多様性といった森林の多面的価値をどう評価するのか。漁業では、資源量の変動や海洋環境の変化をどのように経営リスクとして認識するのか。

自然というものは場所や時期等で大きく変動し、そもそも安定評価が難しいものです。必要な情報は、土壌、水質、生物多様性など多岐にわたり、継続的なモニタリングが不可欠です。企業の会議室では、精緻な指標やフレームワークを使って議論されますが、一次産業の現場では、土が軽くなった（土壌有機炭素量）、湧水の量が減った（水収支）、海水の色が違ふ（クロロフィル濃度）、といった変化を日常の延長で読み取っています。そうした、長年の経験に裏打ちされた感覚は、実は極めて高度な観察力ですが、そのままではTNFDの開示項目に変換できません。重要なのは、この経験知を科学の言葉に翻訳し、評価可能にすること。そしてそれは、一次産業が最も力を発揮できる分野でもあります。

TNFDの議論は専門的に見えますが、本質はシンプルです。自然と企業経営の関係を正しく理解し、持続可能とすることです。その最前線にいるのは、まさに一次産業の担い手です。だからこそ、自然資本の数値化やリスク・機会の認識は、企業だけの問題ではなく、生産から販売までバリューチェーンに携わる者が同じテーブルにつき、「自然を知る知恵」と「自然を測る技術」を結びつけていく必要があると思います。自然の変化を読み取ってきた経験知と科学的知見が結びついたとき、より精度の高い自然資本評価が可能になります。

自然は静かですが、確かに語りかけています。その声をどう言語化し、社会に届けるか。一次産業において、これからの大きな挑戦と可能性があるのではないかと感じています。そしてその第一歩は、自然のつばやきを「聞いたつもり」ではなく、丁寧に聞き取り、その変化を誰もが理解できる形にしていくこと。その積み重ねが、TNFDへの対応につながり、そして何より、次の世代へ自然を受け継げる一次産業につながるのではないのでしょうか。

（株）農林中金総合研究所 理事研究員 波多信宏・はたのぶひろ